

綿花生産などを通じた難民・ホストコミュニティの生計向上に係る情報収集・確認調査 (QCBS)

(実施期間：2023年6月～2024年5月、担当業務：営農（綿花栽培）)

調査背景

ウガンダ北部地域が国境を接する周辺国の情勢は依然不安定であり、多くの難民が流入している。また、同地域では、滞在が長期化しており、受入地域における支援負担が続いている。こういった状況下で、難民・ホストコミュニティ住民両方を含めた零細な農業従事者の生計を向上させるための手段の一つとして、綿花産業が挙げられた。表記案件では、同地域の綿花産業およびそのバリューチェーン、ならびに難民とホストコミュニティの現状と課題を調査し、今後の産業発展に向けた施策および JICA の協力方針に資する情報を整理・報告した。

調査概要

本業務では、ウガンダ北部地域における綿花生産に関する栽培技術と営農分野の調査を担当した。北部地域における綿花栽培の現状と課題を整理した結果、他の換金作物と比較して綿花には多くの利点があり、現地における換金作物として信頼できる選択肢であることが明らかになった。一方で、特に国の研究機関の成果が普及の現場や農家の栽培に活かされていないことが、低収量の主要な要因であると指摘した。

また、オーガニック（有機栽培）綿花とコンベンショナル（慣行栽培）綿花の収入や営農面での違いを比較し、それぞれの利点と不利点を洗い出した。さらに、難民流入地域における営農面の課題を整理し、難民とホストコミュニティの農家にとって綿花が換金作物として機能する可能性を検討した。そのうえで、現地における綿花栽培が信頼を得るために必要な営農条件、普及体制、技術的利点と課題を明らかにした。

調査の結果、ブロックファーミングなどの方法により土地へのアクセスが得られた難民に対しては、食料作物と換金作物としての綿花を作付ける営農モデルが提案できることが明らかとなった。これにより、今後の支援においては、技術指導や農地確保を中心とした支援が必要であることが確認された。

担当事項

- 一般綿花・オーガニック綿花の栽培状況と営農課題の調査
- ブロックファーミングシステムを活用したパイロット圃場における綿花栽培の圃場調査と結果評価
- 難民・ホストコミュニティ混成グループへの綿花栽培研修のモニタリング
- 難民による換金作物栽培の現状と課題の整理
- 難民による綿花栽培の可能性と留意点の整理

Photos



綿花圃場調査



ベテラン有機綿花栽培農家へのインタビュー



パイロット農場の全景



国立農業試験場での綿花研究者へのインタビュー